

# 山口県内の弥生時代貯蔵穴について

森下靖士\*

## 1 はじめに

近年発掘調査の増加に伴って、県内においてもいわゆる貯蔵穴（穴倉）と呼称される遺構の発掘例も急増しつつあり、管見では現在25遺跡をかぞえる。山口大学構内遺跡の発掘調査においても、このたび大学会館前庭部の調査で弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴と思われる一基の袋状堅穴を検出した。これを機会に、本稿では県内においてこれまでに検出された、特に弥生時代に属する貯蔵穴について整理、分類を行ない、それによって導

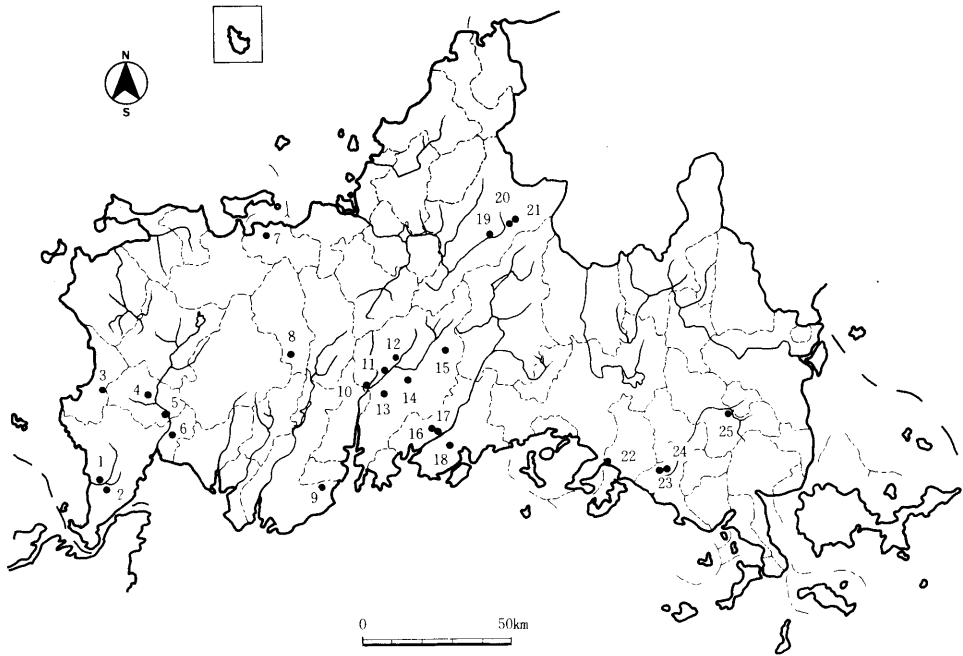


Fig. 105 県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡分布図

\* Yasushi MORISHITA 山口大学大学院人文科学研究科

山口県内の弥生時代貯蔵穴について

Tab. 10 県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡地名表

	遺跡名	所在地	時期	数量	型式	出土食料植物種子類 (出土遺構)	備考	文献
1	綾羅木郷	下関市	前期後半 } 中期中頭	900基以上 (未調査含む)	I、II、V	炭化米、リョクトウ、アズキ?、堅果類(イチイガシ、スタジイ)	植物性食料出土遺構多数	11.12.23
2	伊倉	下関市	前期末 } 中期中頭	82基	I		複式土壙を含む	13.24.35
3	城山	豊浦町	中期前半	3基	I			16
4	坂ノ上	菊川町	前期後半 } 中期中頭	正確な数 不明	II、V			27
5	上原	菊川町	前期後半 } 中期中頭	44基	I、V		焼土、灰を含む。床面に 焼けた痕跡	9
6	堂ノ尾山	下関市	前期末 } 中期中頭	2基	I			23
7	湯免	三隅町	中期後半	1基	III	堅果類(ドングリ、シイ、 クリ第III地区土壙1)		29
8	松ヶ迫	秋芳町	中期前半 } 中期後半	3基	I			26
9	引野	阿知須町	中期中頭 } 中期前半	10基	I			2.3.4
10	朝田墳墓群	山口市	中期前半 } 中期後半	20基	I	炭化米(第11,16,20号貯蔵用土壙)、アズキ(第11,12,15,16,17号貯蔵用土壙)、アラカシ(第1,8,9,10,11,12,13,15,16,17号貯蔵用土壙)		30
11	下東	山口市	前期末 } 中期中頭	20基	I、V	炭化米(YP17, 27)	層をなして出土。床面に木ノ巻層(YP27)やアブラムシ、エゴマ(YP17)、カキノキ、ヒョウタン、マクワウリ(YP27)の出土もあり	10
12	萩峠	山口市	前期末	1基	III	堅果類(イチイガシ、アラカシ YP-1)		10
13	吉田	山口市	前期末 } 中期中頭	1基	I			本書
14	大内氷上古墳	山口市	中期後半	1基	I			33
15	丸山	山口市	中期後半	1基	I			34
16	奥正権寺	防府市	中期前半	1基	I			31
17	大崎	防府市	中期前半	28基	I、II	炭化米(SK9,15,17,30,31) 堅果類(コナラSK-5,31,クヌギSK17,20,31,ツブラジイSK31)	稲穂のまま、層をなす(SK9,15) 土器内より出土(SK30,31)	31
18	井上山	防府市	中期後半	19基	I、II、V(?)			5
19	突抜・馬場	阿東町	前期末 } 中期後半	200基以上	IV			32
20	坂手沖尻	阿東町	中期後半	正確な数 不明	I、II(?)、IV			28
21	惣ノ尻	阿東町	前期末 } 中期前半	正確な数 不明	IV、V			28
22	宮原	下松市	前期後半 } 中期中頭	36基	I、II(?)、V	炭化米(土壙9,11,15,16,17,18,24,27) 炭化米(土壙11) アズキ(土壙4,17,35,36) 堅果類(コナラ土壙4,11,13,18)		25
23	天王	熊毛郡	中期前半 } 中期後半	9基	I、II	堅果類(シイ、カシ、4号 貯蔵穴)		36
24	岡山	熊毛郡	中期前半	2基	II	炭化米、アズキ、リョクトウ、 ダイズ(いずれもA地区貯蔵 住居床面検出貯蔵穴)		36
25	河池	周東町	中期前半 } 中期後半	1基	I			14

## 貯蔵穴の分類

きだされる問題点について考察を試みる事にしたい。

なお、その作業に伴い県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡地名表 (Tab. 9) 及び分布図 (Fig. 105) を作成した。今後の参考となれば幸いである。

### 2 貯蔵穴の分類

現在までに県内で検出されている貯蔵穴には、現状での認識のされ方から大別して三種類のものがあると思われる。第一は袋状堅穴、ドングリピットといった定形的で貯蔵穴として使用されたことが実証されており、かつ、貯蔵穴としてかなり明確な定義付けがなされているものである。岡山遺跡、天王遺跡においてみられるように壁面が垂直で袋状を呈さない点を除けば、立地、規模、出土遺物(特に当時の食料とみられる食用植物種子類)等袋状堅穴に類似し、貯蔵穴であることが実証できるものもこれに含める。第二は、出土遺物の点からは貯蔵穴であることが実証されえないが、立地、規模、形態から推測して貯蔵穴の可能性をもつものである。突抜・馬場遺跡においてみられる、平面長楕円形、断面矩形の深い土窟はこれにあたる。第三は、従来貯蔵穴として認識されていなかったが、筆者が貯蔵穴として扱う必要のあると考える堅穴遺構である。宮原遺跡、上原遺跡などにみられる平面方形ないしは長方形で、断面が矩形(壁面が内傾気味でごく弱い袋状のものも含む)を呈する一群の堅穴遺構がこれにあたる。ここでその形態も考慮に加え県内出土の弥生時代の貯蔵穴のうち、第一とした袋状堅穴をⅠ類、袋状堅穴に準ずるが断面が袋状をなさないものをⅡ類、ドングリピットをⅢ類、第二とした平面長楕円形、断面矩形の

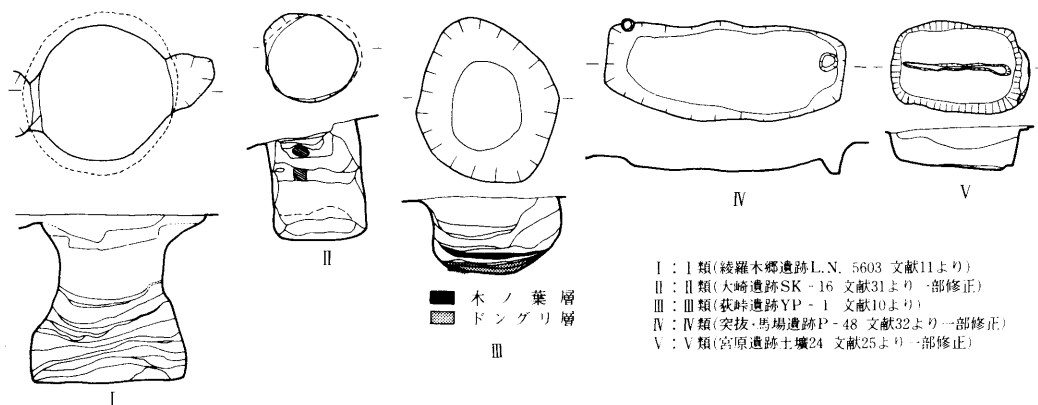


Fig. 106 県内の貯蔵穴の分類

ものをⅣ類、第三とした平面長方（方）形、断面矩形のものをⅤ類とする（Fig. 106）。

以上、県内の弥生時代の貯蔵穴を主に形態と従来の認識のされ方からⅠ類～Ⅴ類に分類したが、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類については貯蔵穴であることに議論をさしはさむ余地はなく、問題となるのはⅣ類およびⅤ類であろう。しかし、Ⅳ類については類例も少なく、また、貯蔵穴としての機能を有することを実証するに足る資料にも乏しいため現状ではこれについて論ずることは困難である。従って、以下本稿ではⅤ類に分類した貯蔵穴について筆者の考えるところを述べてゆくことにしたい。

### 3 Ⅴ類の貯蔵穴について

前節では、県内の弥生時代貯蔵穴をⅠ類～Ⅴ類に分類した。そのうちのⅤ類は、従来は貯蔵穴として認識されていなかった竪穴遺構（以下竪穴と略す）である。本節ではこの種の竪穴について県外の類例もまじえて、その機能、使用方法を検討してゆくことにする。

まず、この種の竪穴（Ⅴ類貯蔵穴）について現在知られていることを概観しておこう。  
この種の竪穴は県内では宮原遺跡、上原遺跡の他、綾羅木郷遺跡、同遺跡上ノ原地区、  
下東遺跡文献10)に類例がある。注1 文献17) 文献21) 県外の類例は福岡県板付遺跡、宝満尾遺跡、合田遺跡、北内  
畑遺跡文献7)、小郡正尻遺跡文献19)などに求められ、板付遺跡をはじめとして袋状竪穴として報告されて  
いることが多い。壁面が弱い袋状を呈するものがあるためであろう。

形態は平面長方形ないしは方形（隅丸のものを含む）で前者のものが多し。断面形は矩形ないしは弱い袋状を呈し、前者が多い傾向にある。規模は方形のもので床面の一辺1～1.6m前後、長方形のもので長辺1.3～2.2m前後、短辺0.7～1.3m前後を計る。長方形のものについては長辺と短辺の比がほぼ2：1となるものが多い。深さは削平により上半部を欠失するものが多いが、遺存状態の良い例から推測すれば0.7～1.3m前後となるだろう。  
一般的に袋状竪穴と比較して浅いものを特徴とする。注2 その他の形態的特徴として、付属施設がある。床面の溝、柱穴状ピット、入口部蓋受けがその主なものである。柱穴状ピットは床面にあるものと、竪穴周辺にあるものがあり、前者は綾羅木郷遺跡上ノ山地区P46（Fig. 107-1）、後者は宮原遺跡土壙23、24などに見られる。前者については、床面四隅及び壁際に2～8個設けられ、県外、特に板付遺跡に例が多い。蓋受け（Fig. 107-3）、床面の溝はいずれも宮原遺跡で見られる。

土層の堆積状況を見てみると、そのほとんどが水平または地形の傾斜に沿った自然堆積の状況を示し、人為的に埋没が行なわれたと思われる堆積状況を示すものはない。宮原遺

V類の貯蔵穴について

跡においては特にそれが顕著に認められる (Fig. 107-1、2、3、4)。

出土遺物は土器及び石器といった生活遺物がその主なものであるが、完形で出土することはごく稀で、破片であることがほとんどである。しかもその出土状況を見ると、床面より浮いて出土することが多く使用状態、例えば床面に据えられた状態で出土することはほ

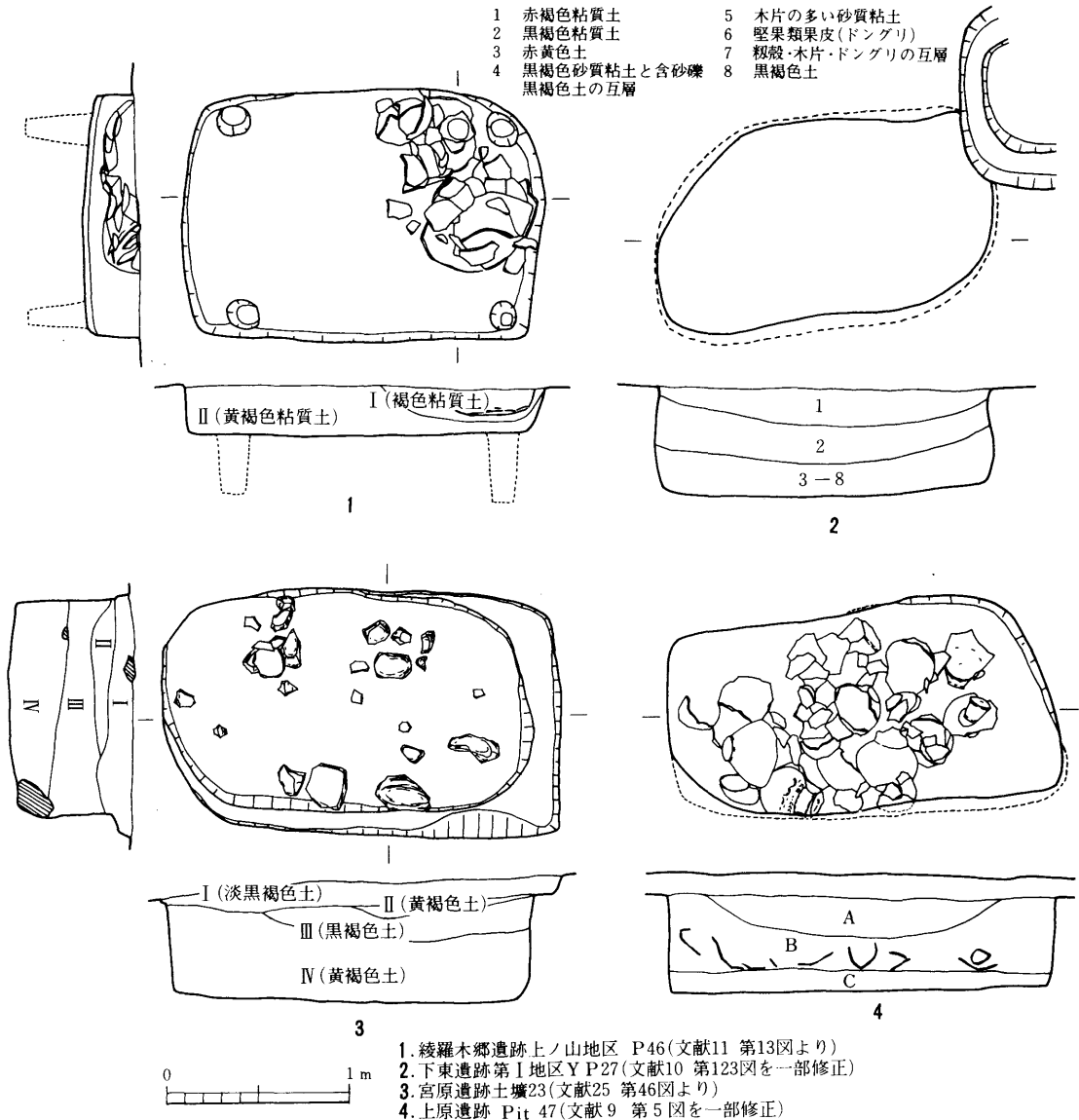


Fig. 107 各遺跡のV類貯蔵穴 (1/40)

とんどない。これらの遺物は堅穴の機能停止後、ごみ穴として使用された際に投棄されたか、あるいは埋没過程での流れ込みと思われる。その他に自然遺物として、食料植物種子類、すなわち、炭化米（宮原遺跡、板付遺跡）、炭化麦（宮原遺跡）、堅果類（北内畑遺跡）等がある。出土状況には大量に層をなして出土する場合と、散在してあるいは単独で出土する場合の二種類があるが、前者はごく稀である。県内例では宮原遺跡で両様の出土状況が見られる。また、焼土、灰、木炭が出土する事がある。床面、あるいは床面<sup>注3</sup>近くで層をなして出土する場合と、床面から浮いてブック状になって出土する場合がある。

時期についてみると、<sup>注4</sup>最古のものは板付遺跡に見られる。夜白式土器及び板付Ⅰ式土器が共伴して出土する弥生時代前期前半のものである。県内における最古例は綾羅木郷遺跡に見られ、綾羅木Ⅰ式土器を出土しており、前期後半でも古期に位置付けられる。時期の新しいものとしては宮原遺跡、上原遺跡に中期初頭に位置付けられるものがあるが、中期前半まで下る例はない。県外、県内を通じてその時間的分布は前期に集中しており、特に前期後半から末にかけてのものが多い。前期前半に位置付けられる例は現在のところ板付遺跡以外では認められない。

さて、この種の堅穴の持つ機能（用途）について、従来幾つかの推論が行なわれてきた。宮原遺跡の調査報告書において、報告者はその機能について貯蔵穴、墓壙（土壙墓）の可能性をあげているが、前者については否定的で、墓壙の可能性が高いとし、その根拠として副葬品と見られる完形の小壺、石剣や、壺棺と見られる大型壺の出土すること、他遺跡における同様の遺構より木棺跡、人骨が検出されること、蓋受けが土壙墓、木棺墓に見られる二段掘りの墓壙に類似することをあげている。また上原遺跡の報告書中、富士埜勇氏は、宮原遺跡の報告をふまえ、床面で完形に近い土器が出土するものがあること、床面に火を受けた痕跡を残すものがあることを根拠として、墓壙としての機能を否定し、土器焼成壙の可能性を論ぜられた。また性格不明の土壙としてされているもの（綾羅木郷遺跡上ノ山地区）もあり、貯蔵穴として扱われているのは綾羅木郷遺跡等数例にすぎない。

以上のように、この種の堅穴は従来その機能として貯蔵穴を当てられることは少なかった。しかし、筆者はこの種の堅穴の機能として、貯蔵穴が最も妥当なものと考えている。

この種の堅穴の機能を墓壙と見る場合、形態の点ではそれを肯定できるものの、土層の堆積状況から見ると、それは全く否定的であるといえる。何故ならば、墓壙とすれば、その土層堆積は一括で埋められるため単一層となるはずであるのに対して、この種の堅穴は、報告書に示された土層図を見る限り明らかな自然堆積を示すものがほとんどである。

## V類の貯蔵穴について

また、黒褐色土、茶褐色土の層をはさむことは、これらの層が一定期間地表に露出していたことを暗示させ、この種の堅穴が自然堆積による埋没過程をたどったことを裏付ける。遺物の出土状況はそれらが廃棄されたことを示すが、墓に対してそのような行為が行なわれるとは考えにくい。従ってこの種の機能として墓壙は不適當である。次に、土器焼成壙と仮定してみると、床面及び壁面に火を受けた痕跡を残すこと、灰、焼土、木炭の出土することからはこれを否定できない。形態上からも同様なことがいえる。<sup>注5</sup>とはいえ、この種の堅穴すべてから以上の諸特徴が見い出されるわけではなく、現状ではその幾つかがこの機能を有する可能性を持つといえるにすぎない。

最後に貯蔵穴としての機能を有すると仮定した場合、この種の堅穴に見られる諸特徴に最もよく合致する。まず、堅穴内から当時の食料に供されたと思われる植物種子類が出土することが挙げられる。遺跡において、これらの食料植物種子類が遺物として見い出される可能性が高いのは、それらが貯蔵された場所、食された場所、廃棄された場所であろう。遺構にそれをあてれば、貯蔵穴、高床倉庫、住居跡、ごみ穴がそれにあたる。なかでも貯蔵穴は、地下に掘り込まれるという点から、内部に収納された食料植物種子類が残される可能性が他よりも高いといえる。この種の堅穴の機能として、住居はその規模の点から除外される。ごみ穴としてこれらの定形的な堅穴を掘ることはないというごく常識的な仮定を認めるならば、その機能もやはり除外される。そうすると、これらの堅穴の機能として残されるのは貯蔵穴である。宮原遺跡における炭化種子類の出土状況を見ると、床面から浮いて、あるいは一ヶ所に偏在して廃棄を思わせる出土状況を示すものもあるが、大半は床面か、あるいは床面に近い層からの出土である。このことは、貯蔵されていた食料植物種子類が何らかの理由で堅穴内に残されたことを思わせる。

次に、堅穴内からの焼土、灰、木炭、などの出土及び床面、壁面に見られる火を受けた痕跡について考えてみる。堅穴は地下に掘り込まれるという性格上、内部の湿度が高いことは避けられない。袋状堅穴を用いて内部の温度及び湿度の計測実験が試みられているがその結果、堅穴内部の湿度は 100%近いものになることが確認されている。<sup>注7</sup>この湿度の高さが、堅穴内部に貯蔵された食料、特に、米、麦などの穀類の保存に大きな影響を与えるであろうことは想像に難くない。防湿のため何らかの処置が取られたことが想像される。焼土、灰、木炭、火を受けた痕跡は、堅穴内部の乾燥を目的として内部で火がたかれたものと見る<sup>注8</sup>ことができる。

また、床面及び入り口周辺の柱穴状ピット、入り口部の蓋受けといった上屋施設、ある

いは被覆施設の存在を示唆する付属遺構の存在することも、貯蔵穴としてのこの種の堅穴の機能を示すものであろう。何故ならば、屋外に貯蔵穴が構築される場合、上屋もしくは被覆施設の存在なしには、日本という湿潤な気候風土を持つ地では到底その機能を果たせないと考えられるからである。

以上の点から、この種の堅穴の機能として貯蔵穴が最も妥当であると考えられる。

それでは、貯蔵穴の使用法としてどのような方法が考えられるであろうか。貯蔵穴内に食料を貯える際には次の二通りの方法が考えられる。すなわち、1、食料を容器に入れて堅穴内に収納する、2、容器を用いず直に収納する、の二通りである。現在までのところ、<sup>注9</sup>どちらの方法が用いられたかを直接に示す資料はないが、上原遺跡において、完形あるいは完形に近い土器が、あたかも床面に据えられていたかのような状態で出土していることからみて (Fig. 107-4)、前者の方法が行なわれていた可能性がある。とはいえ、後者の方法が行なわれなかったとは必ずしもいえない。宮原遺跡においては炭化米に混じって多量の有機物を含む層が観察されており、また、下東遺跡 Y P 26 (Fig. 107-2) において、床面近くで木の葉、木片、炭化粃が互層となって堆積しているのが観察された。後者の方法を用いる場合、床面及び壁面には防湿を目的として例えば藁、粃殻といったものが充填されたと考えられるが、<sup>注10</sup>有機物を含む層や木ノ葉の層はその名残りとも考えられる。

最後に県内におけるこの種の堅穴の系譜について述べておきたい。この種の貯蔵穴の最古の例が板付遺跡環濠内の方形堅穴に求められることは前述したが、それと同時に、<sup>注11</sup>板付遺跡の方形堅穴は弥生時代の貯蔵穴としても最古例である。県内においても、綾羅木郷遺跡をはじめとして弥生時代前期後半に位置付けられるものも最古例とし、綾羅木郷遺跡に見られる平面方形の袋状堅穴を除けば、この時期には他の形態の貯蔵穴は存在していない。下限については、宮原遺跡、上原遺跡での中期初頭に位置付けられる少数例を除けば、ほぼ前期に収まる。県内における袋状堅穴が、中期に至ってポピュラーとなるのに対照的である。上原遺跡においては、この種の貯蔵穴以外に、平面円形の袋状堅穴があるが、遺構の切り合いと出土土器の検討から、前者が後者に先行することが報告されている。県内におけるこの種の貯蔵穴の祖形はやはり板付遺跡の方形堅穴に求められ、弥生文化の流入に伴って県内にも流入定着したものであろう。ほぼ同時期に袋状堅穴も流入したが県内においてまず受け入れられたのはこの種の貯蔵穴であった。そして時間の経過と共に袋状堅穴に取って代わられていったものと思われる。



#### 4 おわりに

以上、県内出土の貯蔵穴をⅠ類～Ⅴ類に分類し、特にⅤ類の貯蔵穴について筆者の考えるところを述べた。とはいえ、この種の貯蔵穴については、特にその機能や使用法を論ずる際に、それらを直接に示す資料に欠けるため、その多くの部分を土層堆積状況、出土遺物などの間接的な資料に基づく推測に頼らざるをえず、隔靴搔痒の感があるのは否めない。本稿において筆者の述べたことも、その意味ではこの種の堅穴（筆者の貯蔵穴Ⅴ類）の機能についてのありうる可能性に新しく一項を付け加えたにすぎない。新資料の増加を待って、改めて論ずる必要があるだろう。また、本稿では筆者の力不足により論ずることができなかったが、Ⅳ類に分類した貯蔵穴についても同様のことを感じている。

最後になりましたが、本稿執筆の機会を与えて下さった山口大学埋蔵文化財資料館館長近藤喬一先生、並びに河村吉行氏、森田孝一氏（現山口県埋蔵文化財センター）には心から感謝する次第です。

#### 〔注〕

- 1) 日本考古学協会による板付環壕遺跡の調査（文献17）、福岡県教育委員会の市営住宅建設に伴う調査（文献21）、福岡県教育委員会の県道505号線新設改良工事に伴う調査（文献22）で検出されている。
- 2) 形態上袋状堅穴と区別されるのはこの点である。袋状堅穴は床面の一辺あるいは床面径と深さがほぼ一致するものが多く、従って、浅いものでも深さ1mを越え、深いものは3m以上にも達するものがある。断面形態においても、袋状堅穴が入り口部に比べて床面が著しく広いのに対して、この種の堅穴は、袋状といっても、入り口部と床面の広さはほとんど変わらないのを特徴とする。
- 3) 焼土、灰、木炭は、袋状堅穴から頻繁に出土することが知られており、この種の堅穴からこれらが出土することは注目される。
- 4) 時期区分の表記については、前期を前半（板付Ⅰ式並行期）、後半（板付Ⅱa式並行期）、末（板付Ⅱb式並行期）中期を初頭（城ノ越式並行期）、前半（須玖Ⅰ式並行期）、後半（須玖Ⅱ式並行期）とする。山本一郎氏の編年では、防長Ⅰ式及びⅡ式が前期後半、Ⅲ式が前期末、Ⅳ式が中期初頭、Ⅴ式が中期前半、Ⅵ式が中期後半に対応する（文献37）。山本氏は防長Ⅰ式が板付Ⅰ式後半期にあたり、前期前半に当てられるが筆者はその考え方は取らない。
- 5) 近年各地で土器焼成壙が検出されているが、形態は様々であり、形態上の特徴からその機能を論ずることは困難である。
- 6) 土壙16及び24では大量の炭化物が出土しているが、土壙16では床面から浮きかつ東壁中央部の壁際に集中して、土壙24では床面出土ではあるが西壁の壁際から土壙中央部にかけて、壁際に厚く中央部にゆくにつれて薄く堆積して出土しており、貯蔵状態での出土とは考えにくい。何らかの理由で食用に適さなくなったものが廃棄されたものと考えられる。
- 7) 袋状堅穴を用いての内部の温度及び湿度の計測実験は、福岡県門田遺跡（文献18）、鳥取県丸山遺跡（文献15）で試みられている。
- 8) 中国にあっては、穀物貯蔵施設として、高床倉庫の他に竇（とう）、窖（こう）と呼ばれる貯蔵穴が使用されたことが元代の農学書『農書』（文献8）の記事にあり（卷十百穀譜十一）、また、これらの貯蔵穴は掘削されたあと内部で火がたかれ、内部を乾燥させたあとに使用されたという記事がある（卷十六農器

## 山口県内の弥生時代貯蔵穴について

譜十)。地面に掘った堅穴を貯蔵用施設として使用する場合、掘削直後の堅穴内部が湿っていることは当然であり、何らかの処置によって、内部の乾燥が行なわれたことは想像に難くない。

- 9) 袋状堅穴においては両者いずれの方法も行なわれていたようである。著名な福岡県津古内畑遺跡(文献6)では後者が、県内では、防府市大崎遺跡(文献31)で両者の例が見られる。
- 10) やはり、『農書』に、竈の床面及び壁面に糠をいれて、貯蔵する穀物を囲ったという記事がある(巻十六農図譜十)。
- 11) 袋状堅穴にも板付遺跡(文献17)で、夜臼式、板付Ⅰ式土器を伴う例があるが、少数例であり、この時期の貯蔵穴としてはこの種のものが主流を占める。

### 参考文献

- 1) 赤村教育委員会「合田遺跡」1985年
- 2) 阿知須町教育委員会「引野遺跡・丸塚古墳群」1977年
- 3) 阿知須町教育委員会「引野遺跡・丸塚古墳」1978年
- 4) 阿知須町教育委員会「引野遺跡」1981年
- 5) 井上山遺跡発掘調査団「井上山」1979年
- 6) 小郡町教育委員会「津古内畑遺跡」1970年
- 7) 小郡市教育委員会「北内畑遺跡」1981年
- 8) 王禎「農書」中華書局出版1956年上海
- 9) 菊川町教育委員会「上原遺跡発掘調査報告Ⅰ」1973年
- 10) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡・萩峠遺跡」1975年
- 11) 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会「綾羅木郷台地遺跡(上ノ山地区)」1986年
- 12) 下関市教育委員会「綾羅木郷遺跡Ⅰ」1981年
- 13) 下関市教育委員会「伊倉遺跡」1984年
- 14) 周東町教育委員会「河池遺跡」1982年
- 15) 鳥取県三朝町教育委員会・花園大学考古学研究室編「丸山遺跡発掘調査報告書」1984年
- 16) 豊浦町教育委員会「城山遺跡」1986年
- 17) 日本考古学協会編「日本農耕文化の生成」1961年
- 18) 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第7集」1978年
- 19) 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-7-」1986年
- 20) 福岡市教育委員会「室満尾遺跡」1974年
- 21) 福岡市教育委員会「板付-市営住宅建設に伴う発掘調査報告書-1971~74」1976年
- 22) 福岡市教育委員会「板付-県道505号線新設改良工事に伴う発掘調査報告書(1)」1977年
- 23) 山口県教育委員会「山口県文化財概要第4集 埋蔵文化財」1961年
- 24) 山口県教育委員会「伊倉遺跡」1973年
- 25) 山口県教育委員会「宮原遺跡・上広石遺跡」1973年
- 26) 山口県教育委員会「幸崎古墳・松ヶ迫遺跡」1973年
- 27) 山口県教育委員会「坂ノ上遺跡」1974年
- 28) 山口県教育委員会「坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡」1978年
- 29) 山口県教育委員会「圃場整備事業に伴う発掘調査報告下関市寺秋遺跡・三隅町湯免遺跡」1979年
- 30) 山口県教育委員会・建設省山口工事事務所「朝田墳墓群Ⅵ」1983年
- 31) 山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「奥正権寺遺跡・大崎岡古墳群・大崎遺跡」1985年
- 32) 山口県教育委員会「よみがえる弥生のムラー突抜・馬場遺跡-」1985年
- 33) 山口県教育委員会「大内氷上古墳」1986年
- 34) 山口市教育委員会「丸山遺跡」1983年
- 35) 山口大学考古学研究室「西部瀬戸内における弥生文化の研究」1984年
- 36) 山口大学島田川遺跡学術調査団「島田川」1953年
- 37) 山本一朗「防長の弥生式土器」周陽考古学研究所『山口県の弥生式土器-集成と編年-』1979年